

芸術文化学部

日

本

文

学

科

研究創作

Japanese
Literature





芸術文化学部長
灰谷 謙二

知と美の探究と創造を理念とする本学は、美術学科と日本文学科を併せ持つ芸術文化学部を設置しました。カリキュラムの考え方や学問領域としての特性の違いも大きく、一般的にはこれらを一つの学部にすることはありません。大学が発展する、母体になった尾道という都市の地勢的条件、経済的發展、文化的背景、そしてそこから生まれた人々の志が形になった稀有な学部だといえます。

日本文学は、日本語という言語的枠組み、社会的ルールの制約のなかで行われる文化現象を広く扱うという点で美術と異なりますが、どちらも、人の営む創造、価値・表現を扱い、真理を追究するという点では共通します。さまざまな場面での交流が、縁遠い世界だと思っていたものを重なり合わせ刺激しあい、新しい創造の機会に富んだ場になっています。

世に文学の街といわれる場所には松山や金沢がありますが、尾道もそう認識される場の一つです。これらに共通する点を二つあげてみましょう。一つは、経済的發展が背景になり、多様な人々が集まる場、その交流のなかで新しいものが生まれるロケーションで、異なるものを積極的に受け入れ、創造の機運を高める素地がある点ではないかと思います。もう一つは人を育てる気風でしょうか。経済的な發展は地域の文化活動を大事にする精神的余裕を生みます。その意味と重要性を知った街は、それが短期的な実益や利害と結びつかなくても、人を育て人材として世に送ることを誇りとする伝統をつくり守っていきます。

このようなロケーションと志に支えられた街の芸術文化学部で学ぶことは、必ずユニークな意味を生むでしょう。芸術文化、ことばとことばで紡がれる知と美の世界を、ここでもに探究していきましょう。



日本文学科の入学者の受け入れの方針（アドミッション・ポリシー）

日本文学科では、豊かな人間性と幅広い視野、高度な言語運用能力をもとに諸共同体のリーダー・教育者・創作者等として主体的に社会に貢献できる人の育成を目指しています。自らの力でテキストの精読や実地調査に基づく分析を行い、他者との議論や対話を通して言語文化の探究と創造に取り組む活動に重点をおいた教育を展開します。

このような教育理念・目的に基づき、日本文学科は次のような人を求めています。

- ・高等学校等までの教育課程において確かな国語の力を身につけた人
- ・問いをもって対象に向き合い、論理的に思考し判断する力を鍛えてきた人
- ・知的探究心をもって日本語・日本文学を深く研究していく意欲がある人
- ・文学作品のもつ多様な価値観を柔軟に受け止められる人
- ・読解力・表現力・対話力を活用して協働的に社会に参画する意欲がある人

詳細はこちら



日本文学科の授業

日本語学・日本文学・中国文学・欧米文学と、周辺領域である、民俗学・伝承文学・文芸創作・国語教育学等を専門教育科目とし、専門教育科目に発展的に関連・連携する、学部の特性を活かした学部共通科目、教養教育科目を配置しています。

自らの力で文学や言語についての資料を調査し、読み解き、それをもとに論理的に思考し、言語文化の探究と創造に取り組むために、議論や対話を重視した専門演習を配置します。これら言語文化の探究と創造の成果として、卒業論文・卒業制作を課しています。

豊かな人間性と幅広い視野をもって、高度な言語運用能力を発揮し、他者と議論や対話をおこなうための、少人数双方向教育を実施します。

学科紹介動画はこちら



授業紹介1

日本語学基礎演習
レポーター

川上 正悟

(日本文学科2年)



この日本語学基礎演習の講義では、古典語の文献資料を扱い、古典語への知識を深めるとともに、発表のための資料作りや質疑応答などによって、論理的な思考を身に付けるための演習を行います。昨年は、ポルトガル語で書かれた現存最古の日本語学書『ロドリゲス日本大文典』の訳本を用いて演習発表を行いました。私は、本書において形容動詞の連用形を副詞として用いる用法が現代と同様かを、活用と文法的意味から考察しました。

ここまでの説明で、難しそうな講義だなと思う方もいらっしゃると思いますが、ご想像通り、かなり大変な講義です。内容が難しく作業もたくさんあるため、「1年生で受ける講義の中で最も大変な講義ランキング」があるとすれば、余裕でトップ3にランクインです。発表資料の準備に始まり、資料集めや補足資料の作成、最終レポートの作成など、忙しすぎていつそのこと図書館に住んでしまおうかと思うほどです。

そんなに大変な講義なのか!という感じですが、内容が盛りたくさんなだけに、きちんと取り組めば、今後の演習に必要な力を十分に身に付けることができます。この点が、演習科目の1番の目的と言えるでしょう。

何事も楽しんで取り組むことが大切ですから、皆さんもこの試練を乗り越えてくださいね。

授業紹介2

近世・近現代文学専門演習
レポーター

岡 来瞳

(日本文学科4年)



日本文学科の専門演習講義では、日本文学やその周辺領域の専門知識を深め、文学研究の方法を学びます。

近世文学専門演習では江戸時代の作品を読み、くずし字の判別をする「翻字」、本文内の語句の意味や用法を分析する「注釈」、本文の「現代語訳」の発表を行います。近世と現代では、同じ言葉を用いても意味や用法が異なっている、ということがあります。そのわずかな差異を検討し、自分なりの分析や考察を行っていくことで既存の枠組みにとらわれない多角的な視点を養っていきます。また、発表と質疑応答という講義形式は他の履修者との討論を通して自身の考えを深めることができます。

さらに、私は専攻する近世文学のほかに近現代文学専門演習も受講しています。近世と近現代は歴史的に地続きであるだけでなく、文学作品もそれ以前の時代の作品に影響を受けながら生み出されています。そのような文学史の流れを広い目で捉え、自身の興味関心がある領域を学んでいくことで、異なる時代同士の繋がりを実感しています。



『浮世親仁形氣』(名古屋大学附属図書館所蔵)
出典: 国書データベース, <https://doi.org/10.20730/100272715>



授業紹介3

中国文学講義
レポーター

福澤 綾

(日本文学科4年)



中国文学講義では漢詩について学びました。漢詩というと杜甫や李白といった唐代の詩人やその詩を思い浮かべる人が多いと思います。この授業ではそうした唐代の詩をゴールに、その少し前の六朝時代のものから順に詩を取り上げ、その内容や解釈について考えます。授業で扱う詩の中には自然の素朴な風景や友人との別れの悲しみ、あでやかな妻の姿など様々なことが詠まれていました。何かに感じ入ったり別れを悲しんだりする気持ちは国や時代が違っても通じるものがあるなと感じました。

内容に加えて、漢詩の種類や韻などのきまりについても学びました。一句の字数や句数が決まっていたり韻を踏んだりするのはもちろん、漢字ひとつひとつの韻によって使える字が決められていたり、発音や声調によってリズムを生み出すなど、意外にも決まりごとが多いことや音楽っぽい部分があったことに驚きました。このような決まりごとについても唐の時代に近づくにつれて整えられ、完成していったことが分かりました。

詩の解釈や韻などの決まりごとについて理解するのが難しいと思うこともありましたが、普段はあまり触れることのなかった漢詩を味わえる授業です。



授業紹介4

中古文学ゼミ
レポーター

田中 美麗

(2024年度卒業生)



本格的に卒業論文を執筆するのは4年次ですが、2年次には自分の入るゼミを決定し、3年次には自分のテーマを決めて研究が始まります。中古文学ゼミの場合、まずは自分の研究したい作品を決定します。私の場合、3年次の4月には『源氏物語』を研究作品に決定し、気になる部分を研究していく中で、同年11月に行われる中間発表会までに、本格的に研究テーマを決定しました。

毎回のゼミでは、各週それぞれの発表担当者が自身の研究内容を発表し、それに対して質疑応答を行うなどして全員で検討し合います。人数によっては、3年生と4年生が一緒に行くこともあり、先生や同級生からだけではなく、先輩や後輩からも意見をいただくことができるため、自分の研究を様々な視点から再検討する良い機会となっています。

大学に通う4年間は、自分の興味・関心のある分野を専門的に学ぶことができる貴重な時間です。ゼミでは、その半分の2年間を使って、卒業論文執筆に向けての研究を行うことができます。限られた時間の中で、私は、自分の「知りたい」を追求し、新たな視点で作品を再解釈することの楽しさと大変さの両方を学ぶことができました。



広島県立歴史博物館「源氏物語の世界展」にて牛車体験乗車中



里帰り中の「源氏物語貼交屏風」を見学した浄土寺(尾道)にて

私と尾道市立大学の出会いは、今皆さんが手に取っているこの大学案内でした。進路指導室に並ぶ大量の赤い過去問や白を基調とした学校案内の中で、一際異彩を放っていたこと、それに導かれるようにページを捲っていたこと、今でも鮮明に覚えています。

私は日本文学科でしたが、隣を見れば経済情報学科と美術学科があり、カリキュラム次第で他分野を学ぶことができました。3学科だからこそその結びつきの強さが尾道市立大学にはあります。それが自分の専門分野以外と繋がる練習として、とても有難いものでした。

例えば、美術学科の方に絵やデザインを依頼して創作物を一緒に作り上げたり、経済情報学部の方にマーケティングを依頼して需要と供給について考えたり。自分の得意を超えた経験は学科同士の繋がりが深い尾道市立大学だからこそ得られたものでした。そこで得たものは経験だけでなく、そこで得た人との縁は今でも続いています。

インターネットを使えばどんな国のどんな人とも簡単に繋がることのできる時代です。そんな時代だからこそ、他分野の方と直接関わり、それぞれの得意分野で自分の力を活かすことができる、そんな経験を大学生として積むことができたのは今の私を支える武器となっています。

人との対話の中には必ず「ことば」があります。古典から現代文学、言語学や民俗学、外国語に創作まで、幅広い「ことば」に触れることができる日本文学科での学び



は、仕事に限らず私の人生における基礎となっています。

私は現在、市役所職員として税金や保険料を管理する仕事をしています。市役所の仕事は様々な専門知識が必要となり、他分野、他業務との連携が重要となります。その中で、尾道市立大学で学んだ他分野と繋がる経験や「ことば」は、力強く私の背中を押してくれています。

文学の街である尾道市立大学だからこそ学べる「ことば」があります。ここでしかできない経験もあります。それは職業に関わらず人生において皆さんの力になります。尾道市立大学であなただけの「ことば」や経験を見つけてみてください。

市役所勤務

戸出 莉央
(2018年度卒業生)

私は現在、メガネや補聴器などを取り扱う眼鏡屋のスタッフとして働いています。お客様の求める商品を販売する商業としての一面もある一方、視力や聴力などのライフラインを支える医療的な側面もあるため半

医半商の職業と言われています。商品知識や眼・耳に関する知識、様々な検査の手法など日々学ぶことが多く、大変ながらもやりがいのある仕事だと感じています。

私が眼鏡業界に興味を持ち始めたのは、本格的に就職活動を始めた大学3年の冬頃でした。それまでは、この業界で働く未来があるとは想像もしていませんでした。可能性を狭めず様々な業界に興味を持ち、あれこれと行動してみたことで今の自分と出会えたと思っています。今、大学生活で得られた様々な学びや挑戦に助けられる場面が多々あります。

例えば、日本語を学ぶことで得られた読解力は職場でも活かされています。この業界で重要なのは、お客様の主訴を明確に読み取ることです。難解な論文を読解したり、要点をレジュメに纏めたりしてきた経験から要点把握力や対応力が身に付いたと考えます。また、お客様と会話しながら商品の魅力を紹介することも大切です。大学のゼミでキャッチコピーの研究をしたことや、プレゼン大会に出場したことが表現力を鍛える助けになったと感じています。お



客様へ情報や見解を分かりやすく伝える説明能力も、ゼミや発表会で発言してきた経験が繋がっていると実感しています。

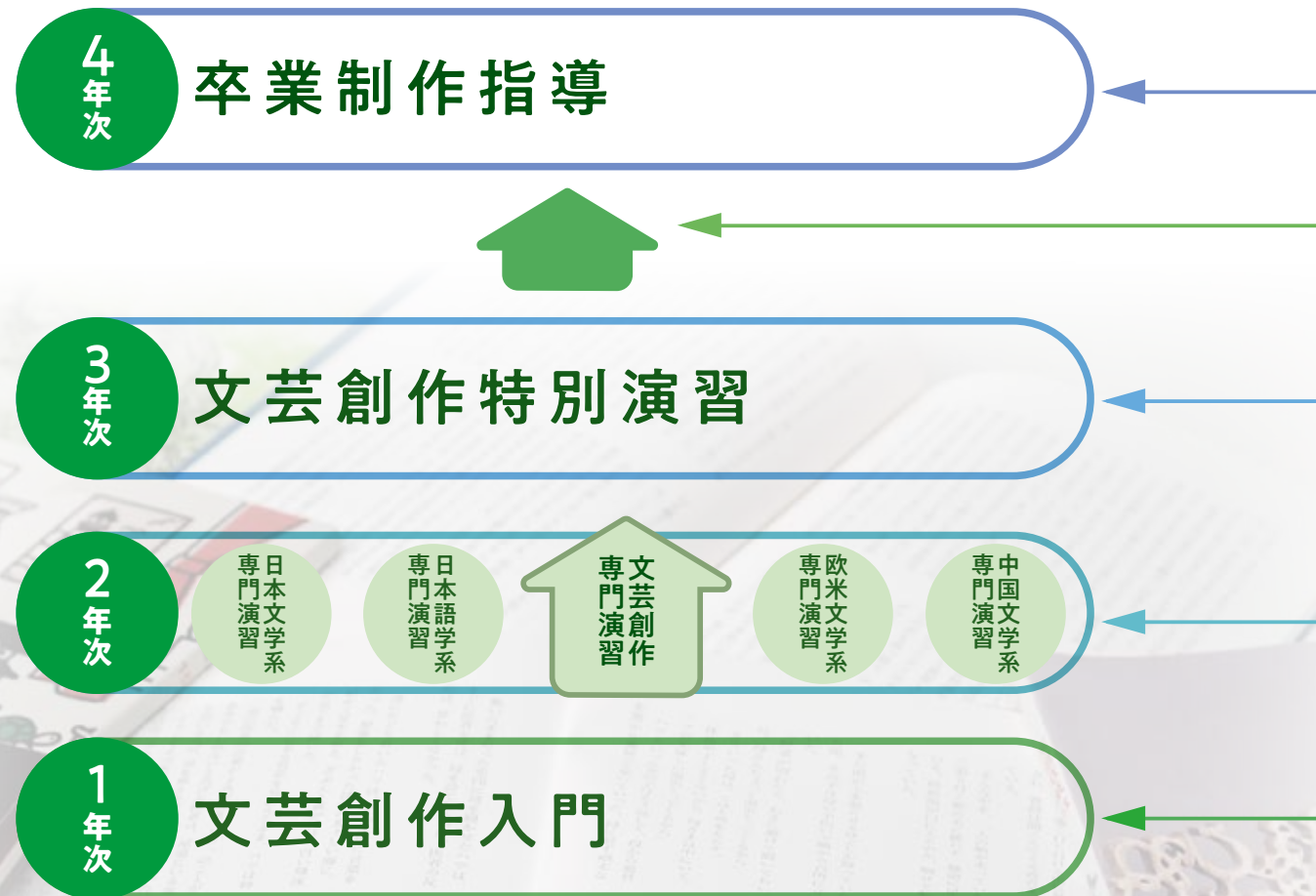
大学で得られる知識や経験は、確実に未来の自分も成長させてくれます。その価値を自分のものにするため、これからは是非色々なことに挑戦して可能性を広げてほしいと思います。また、尾道にはラーメンや海鮮など美味しいご飯が盛りだくさんで、国宝・文化財が集まる寺院や映画のロケ地など素敵な場所で溢れています。是非、尾道での生活も楽しみながら様々な出会いを経て、かけがえのない大学生生活を過ごしてほしいと思います。

株式会社メガネトップ(眼鏡市場)勤務

西澤 真悠香
(2023年度卒業生)



尾道市立大学日本文学科には、学生自らが新たな文学作品を創作し卒業制作として提出する〈文芸創作プログラム〉があります。



卒業制作のジャンル等

卒業制作では、主に小説の執筆に取り組む人が多いですが、戯曲を書いて上演したり、オーディオドラマの脚本を書いて制作したり、詩作と批評を組み合わせるなど、形式も様々です。ジャンルもミステリー、SF、ファンタジー、歴史小説、時代小説など多岐にわたり、複数のジャンルを横断するような形でライトノベル要素の強い小説を書き上げる人もいれば、いずれかのジャンルに単純には分類することのできない複雑なモチーフ・テーマを取り上げる人もいます。

文芸創作を志望する人たちの取り組み

4年次 文芸創作ゼミの開講

3年次に取り組んだ研究の成果を活かしつつ、卒業制作に取り組めます。卒業制作は韻文／散文、ジャンルを問わず、自身の立てたテーマに沿った形式を選ぶことができます。
私は「表現面で韻文の要素をいかに散文に活かせるか」をテーマの1つとして掲げ、3年次に研究した詩の連続性や区切れを小説の表現に活かしていきたいと考えています。

選考について

3年次終了後、創作ゼミに入るための選考が行われます。選考は、希望者が定員の10名を下回る場合でも行われます。3年次までの成績 (GPA)、ポートフォリオの学修記録と読書記録、外部の文学賞・コンクールへの応募が主な選考基準となります。1年次からこまめにポートフォリオを記録し、文芸創作に取り組んでおくことが大切です。

選考を通らなかった場合は、3年次に所属していたゼミで4年次も引き続き研究を行います。

3年次 研究ゼミに所属

ゼミに所属し、そこで研究を行います。この1年間の研究成果が4年次の創作の基礎となるため、しっかりと取り組む必要があります。私は近現代文学のゼミに入り、山村暮鳥作品である「雲」、「おなじく」、「ある時」という3篇の詩を取り上げて、その連続性や区切れについて研究を行いました。視点人物の視線と意識の段階的な変化やタイトルの違いから、3篇に通底する連続性と区切れを見出し、その表現的な効果について考察しました。

2年次 専門演習を履修

2年次には他の専門演習 (日本文学・日本語学・欧米文学・中国文学系) とともに、文芸創作専門演習が開講されます。文芸創作専門演習では、創作のあるべき姿や実践的な創作の技術を学ぶことができます。グループディスカッションの時間もあり、私は他の受講生との意見交換を通して、創作に対する自身の考えを深めることができました。

文芸創作ゼミを志望する場合、3年次には研究を行い、その成果を4年次の創作に活かします。そのため、文芸創作ゼミの志望者は文芸創作専門演習とは別に、3年次に所属したい研究ゼミの専門演習も履修します。3年次、研究ゼミに所属しながら履修することも可能です。また、選考に向けて、3年次にどのような研究に取り組み、それを4年次の創作にどのように活かしていくのか、2年次のうちに大まかな見通しを立てておく必要があります。

1年次 文芸創作入門を履修

文体や修辞学、メディアに関する講義を通じて、創作という行為に対する知識を深めます。また、事後学修として、各回のテーマに沿って文体模写などの創作課題に取り組めます。提出した課題は全体に公表され、合評会という形で他の受講生との相互評価も行われます。最終課題では、他の受講生と協力して雑誌の作成に取り組み、視覚メディアの効果や特徴について学ぶことができました。



日本文学科4年
津島 衣葉

日 本 語 学



日本語学（現代語）
教授

灰谷 謙二

〇〇方言とか〇〇語とか、いろんな概念で区切られ語られるものを「～ことば」ということがあります。わたしたちが人とまじわり人と生きていく、その切実な生活実感をともなうとき「ことば」と呼びたくなります。現代語を扱いますが、「今を生きる、生活の中の話しことばと書きことば」の表現であることを置き去りにしないよう心がけています。



日本語学（古典語）
教授

藤本 真理子

今、私たちが話したり書いたりしていることばと、昔の人のことばとは、どこかでつながっているはずなのに、どんなふうに変ってきたのか、分からないことがまだたくさんあります。古い資料の全てが残っているわけではなく、資料の点と点とをつないで、歴史や変化の図を描いていくのは、私たちに任されています。他言語や日本の方言など、さまざまなことばの変化をヒントに、皆さんもストーリーと一緒に描いていきませんか。



日本語学（言語学）
講師

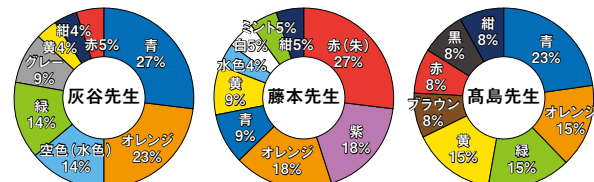
高島 彬

なぜ世界には多くの言語があるのか。なぜ「ことば」は世界に1つではいけないのか... その答えは、それぞれの「ことば」にその「ことば」を話す人たちの思考や世界の捉え方が色濃く反映されているからです。「ことば」の研究を通して人間について深く考える。この面白さを多くの学生と共有し、共に探求していきたいと思っています。

日本語学系の授業って?どう?? 日本文学科の学生に**日本語学系の授業のイメージ**を聞いてみました。

イメージを「数値化」してみよう!!

Q1：日本語学の先生の授業を「色」で表すなら何色？



灰谷先生 オレンジ：授業で学生が発表しているときいつもニコニコ聞いてくれるから
 水色：灰谷先生の中にある膨大な量の専門的知識を感じられ、日本語学の無限の可能性を感じられるから

藤本先生 赤：語学に対する愛情を感じられ、少し厳しいイメージもあるため情熱の炎を感じられるから
 紫：端的に物事をハッキリと伝えるため、冷ややかなイメージがあるが、隠しきれない温厚さと優しさが滲み出ているため、赤と青の混色

高島先生 緑：文章を書く上での基礎の内容が多いイメージで、優しい緑が思い浮かんだから

イメージを「可視化」してみよう!!

Q2：日本語学の授業を「オノマトペ」で表してください!



灰谷先生 ほわほわ：ほんわかした雰囲気授業で落ち着く
 キラキラ：方言の話をされている先生の表情がキラキラ輝いているから

藤本先生 すーっ：説明に使われている例がわかりやすく、すっと頭に入ってくるから
 びよんびよん：ロドリゲス日本大文典の調査は大変だったけど、深く知ることができて楽しかったから

高島先生 サクサク：日本語の様々な表現について要点をおさえてサクサク進む授業だから

Q3：日本語学の先生の授業を「動詞1語」で表すなら？

灰谷先生

✓ **語る**

方言が好きなんだらうなあということが伝わってきて、授業というよりは、推しに対しての語りを聞いているような気持ちになって、面白いから。

✓ **はにかむ**

本当に楽しそうに授業をなさるので、こちらまで自然と笑顔になってしまう。また、発音の実践を通して表情筋が鍛えられるから。

藤本先生

✓ **積もる**

新たな辞書や画像資料が多く登場する講義で、その説明文もかなり詳細にレジュメに描かれているのですが、その量から新たなものが登場する度にドンッと分厚い本が目の前に積まれていくイメージ

✓ **掘る**

一つの言葉に対して深掘りしていく授業だと思うから

高島先生

✓ **考える**

普段当たり前に使っている言葉について改めて考えることが多いから

✓ **広がる**

今まで見えなかった、しなかった解釈を広げて見つめ直すから

中古文学

教授
宮谷 聡美



私は『伊勢物語』とその周辺の文学に興味を持っています。「歌物語」の時代の後に『源氏物語』のような長編物語が創作されるようになって、物語に和歌は不可欠なものであり続けました。

講義では『伊勢物語』『源氏物語』や文学史、演習では『古今和歌集』『枕草子』などを取り上げ、古典の中に見える人々の思いや**価値観**に触れることが、現代に生きる私たちにとってどのような意味を持つのか考えたいと思います。



中古文学ゼミ風景

中世文学

教授
藤川 功和



『源氏物語』と同じぐらい書名を知られているであろう『百人一首』は中世文学の範疇ですが、実に様々な形で読者に享受されました。**絵**入り本もその一つで一首ずつ和歌の内容を絵で表した歌意絵(かいて)が付いた書籍が江戸時代に多く出版されていて、それらを読み比べると和歌への理解のあり方の**変容**をしばしば目にします。例えば右頁は…

古典文学



日本近世文学とは江戸時代の文学のことで、私は近世中期(1700年代頃)の文学や本屋の出版活動などを中心に研究しています。

近世文学の世界には、漢詩や和歌といった伝統的な文芸から、浄瑠璃や歌舞伎、読本や草双紙といった新興的な文芸まで、**多様**で魅力的なものが多くあります。これらを読み解き、学ぶことの楽しさを一緒に味わいましょう。

今日の絵本に相当する「草双紙」というジャンルのうち、とくに「合巻」と呼ばれるもの。本書は曲亭馬琴が著した読本『南総里見八犬伝』を抄録して合巻に仕立てたもの。表紙に描かれた絵は上下2冊を横に並べることで1つの図柄を完成させる。



笠亭仙果 作・一陽斎豊国 画
『**犬の草紙**』二十一編(上下冊)の表紙
(吉田架蔵本)

近世文学

准教授
吉田 幸





教授
柴 市郎

私の専門領域は日本近代文学です。明治時代から昭和期までの文学を主要な研究対象としています。作家で言えば、夏目漱石や小林秀雄といった文学者たちが対象です。さらに現在は、映画など活字メディア以外の分野についても考察しています。

近年、文学研究の世界は多様化し、学会の研究誌にも、アニメーションなどのサブ・カルチャーや映画に関する研究論文が掲載される時代になりました。

こうした新たな文学研究の動向にも配慮し、多様なジャンルの表現にも視野を広げてもらえるよう、講義・演習をおこなっています。



近 現
明 大
治 正

【コラム】〈文学の街〉の中世

尾道は、2015年に「尾道水道が紡いだ中世からの箱庭的都市」として、日本遺産に登録されました。そんな尾道の来訪者の一人、今川了俊(1326～1414頃)は、室町幕府の武将にして和歌などを良くする優れた文人でもありました。彼は九州遠征の途次に尾道を訪れていて、紀行文『道ゆきぶり』には「北に並びて浅茅深く、岩ほ凝りしける山あり。麓に添ひて、家々所せく並びつつ、網干すほどの庭だに少なし…」と、今に通じる景色が活写されています。

一方で、了俊は、「さても備後は、鏡にすべき文も少なく…」(それにしても、備後には、手本にできる書物も少なくで…)とも記しています。志賀直哉や林芙美子ら文豪に愛され、今では〈文学の街〉とも称される尾道の中世における意外な一面が、『道ゆきぶり』から垣間見えます。



今川了俊(俗名貞世)像
(尾道市立大学附属図書館蔵『武家百人一首』に拠る)

代 文 学
昭 平 令
和 成 和



教授
原 卓史



【ゼミ風景】 人数：10名

卒業論文のテーマ：江戸川乱歩、太宰治、夢野久作など

【授業】 前期：「日本の文学」、「日本文学史」、

「近現代文学専門演習」、「卒業論文(構想・準備)」など

後期：「日本文学講読」、「日本文学講義」、

「近現代文学専門演習」、「卒業論文(制作)」など

【著書&編集協力】 『坂口安吾 歴史を探偵すること』(双文社出版 二〇一三年)

【研究対象】 坂口安吾・太宰治など／歴史時代小説／カストリ雑誌



近現代文学専門演習Iを履修して

私がこの授業を履修したのは、近現代文学研究の基本的な進め方を学び、作品の読解や研究に必要な姿勢を身につけるためでした。

私は、夢野久作をはじめ近現代期の日本文学作品に興味があり、研究していきたいと考えています。その基礎になると考えて履修しました。

専門演習を通して、先行研究の論文・図書の探し方や、作品を読み解くための様々な観点など、まずは基礎基盤を固めることができました。

同じく原先生の担当される「日本文学史Ⅴ」「日本文学講読Ⅴ」でも、研究の進め方や様々な文学理論を学んでいたのですが、専門演習ではそれらを自分の中により取り入れることができたように感じます。作品と深く向き合う中で考察の手掛かりを得たり、先生や他の受講生との質疑応答から自分が見えていなかった盲点に気付いたりできます。これがめちゃくちゃ面白いんです！

近現代文学は、作品そのものの解釈を深める楽しさや、その後ろにいる作者の息遣いを感じられるのが魅力的だと思います。テキストから広がる「読み」の可能性の大きさをたびたび実感しています。



日本文学科3年
宮元 望



教授
鷹橋 明久

中国文学



日本文化は長い歴史の中で多彩な地域の影響を受けて形成されてきましたが、その中でも中国文化は漢字や思想、芸術様式などを通じて、日本の文化や文学に深遠な影響を与えてきました。私は特に、魏晉南北朝の詩文に専門的関心を寄せ、この時代に生まれた文学的革新や美意識が、どのように日本の和歌や物語文学に創造的影響を及ぼしたかを探究してまいりました。

私が注目しているのは、魏晉南北朝文学における「言志」の伝統や「玄学の世界観」、さらには「山水文学」の萌芽が、日本で独自に咀嚼され、文化的アイデンティティの核として根付いていく過程です。例えば、建安文学の情感表現や竹林七賢の清談思想、陶淵明の田園詩に見られる隠逸の美学などが、日本の貴族文化や隠棲文学に与えた示唆は計り知れず、そこから日本文学が独自の美学を育んでいくダイナミズムには、文化交流の創造的可能性が凝縮されています。

現代社会では、世界中の文化や情報に瞬時に触れられる一方で、魏晉南北朝という中国文学の変革期が培った知的冒険精神や美意識に親しむ機会が減少しがちです。しかし、この時代の書法や文人思想を継承した芸術実践を通じて古典の精神を受け継ぎ、現代的感性で新たな表現を模索する人々も着実に増加しています。私の授業や研究においても、魏晉南北朝の詩文の精読にとどまらず、政治的分裂と文化的統合の時代背景、儒教・道教・仏教の思想的交錯、東アジア諸国への文化伝播など、重層的な視座から文学を読み解くことを重視しています。

このような多元的視点から魏晉南北朝文学に向き合うと、「文」と「質」の相克、個性的表現の勃興、士人意識の変容など、激動期ならではの文学的営みが浮かび上がってきます。この理解は、多様な価値観が交錯するグローバル社会において、異文化への深い洞察力和柔軟な思考を育む貴重な基盤となるでしょう。

皆さんと共に、阮籍や陸機、陶淵明、鮑照や謝靈運といった文人たちが魂を込めて紡いだ作品の魅力や、そこに宿る普遍的思想を共有し、新たな気づきと創造の源泉としたいと願っています。魏晉南北朝の詩文が今日に伝える言葉の深み、表現の妙、そして士人たちの精神世界を、授業を通して一緒に探求していきましょう。そこに見出される美意識や思想は、現代を生きる私たちにも新たな発見と示唆をもたらしてくれるはずです。



教授
藤井 佐美

民俗学・伝承文学

隣接領域である文学と民俗学に注目しながら、日本の伝承・文化を研究しています。個人的には、学侶が唱導に用いた昔話や伝説などの口伝の世界を研究対象とし、地域の文化調査も進めています。まったく別世界に思われる分野が自然に結びついたとき、日本文化の奥深さを実感すると同時に伝承の世界が少しずつ身近になります。ゼミには好奇心旺盛な学生たちが集まり、バラエティに富む調査・研究を楽しんでいます。



准教授
山田 和大

国語教育学



「国語教育学」と聞いて、高校生までに授業を受けてきた経験から、なんとなく読み書きの力を高める方法を考える学問というイメージがあるかもしれません。確かにそれは間違いではありません。しかし、「国語教育学」の射程はもっと広く、国語科における教育の方法、読む・書く・話す・聞くという行為のメカニズムの解明、そもそも「国語」とは何かということを考える、など、扱う対象が多岐にわたります。つまり、子供たちの「言葉の力」を高めることに関することであれば、なんでも扱う学問であるということが出来ます。多様な領域を扱うがゆえに他の学問領域を意識しながら＝多様な人々と関わりながら、研究を進めていくことになります。

私自身は、「国語教育学」のうち、文学研究と子供たちの「言葉の力」の成長とをつなぐ側面に重点を置いて研究しています。多様な人々と関わりながら、子供たちの「言葉の力」を高めていくことのできる人材を育てていきたいと思っています。



講師
島田 喜行

哲学・倫理学



「哲学・倫理学?」、「興味はあるけど難しそう。」このようなイメージを抱くのも仕方ないのかもしれませんが。というのも、「哲学」とは何か、という問いにたいして、ビシッと明快に答えることはとても難しいからです。そもそも哲学は学問なのか。倫理(学)や道徳と違うのか。もし違うのなら、どこがどう違うのか。こうした問いはどれも、哲学者や研究者の間でも答え(意見)が色々とできそうな難問です。わたくしもまだ最終的な答えを見つけられていません。

最終的な答えは提示できません。しかし、どんな哲学・倫理学にもあてはまる(とわたくしが考えている)ことなら提示できます。それは、哲学・倫理学が「世界－私－他者」について、その「在り方－生き方－関わり方」をめぐる、じつに多彩な思索を積み重ねてきた、ということです。この広大な思索のなかには、みなさんが知りたいと願うことの―答えではなく―手がかりがきつとあります。みなさん、自分が本当に知りたいと思うことの手がかりを見つける知的な探究を始めてみませんか。

欧米文学



教授
小畑 拓也

20世紀中頃以降のアメリカのSF (science fiction/speculative fiction)の研究を出発点として、文化研究 (cultural studies)の立場から、娯楽として消費されるステレオタイプ化したイメージ(ロボット、異星人、モンスターなど)の分析・再解釈を通じて、差別／排除を正当化しようとする「毒になる物語」への解毒剤を提供することを目指して、試行錯誤を続けています。

「欧米文学概論」・「欧米文学講義」・「比較文学」の講義科目では、「文学」との関わり方を「趣味・消費」から「研究・再生産」へと切り替えてゆく上で必要となる、専門用語の提示・解説に注力しています。演習科目の「欧米文学専門演習」では、情報収集と分析の訓練を外国語資料の読解を通じて積んでもらうことにしています。



英語



教授
高垣 俊之

私は主に2・3年生を対象に英語を教えています。学生の皆さんの中には、大学に入ってからでも英語を勉強しなければならないのかと溜息をつく人がいるかもしれません。しかし、洋の東西を問わず、有名な作家や知識人の多くは外国語学習あるいは外国生活を通して言語観や表現技能を高めていったと思われる節があります。皆さんにも意欲的に英語と格闘してもらい、母語と外国語の言語能力に磨きをかけてもらいたいと願っています。

研究面では、英語の習得と使用に関する諸問題をマルチリンガリズムの枠組みの中で考えています。研究成果としては以下のようなものがあります。

- ・『新装版：カナダの継承語教育—多文化・多言語主義をめざして』(2020) 共訳. 明石書店
- ・『英語デトックス—世界は英語だけじゃない』(2016) 分担執筆. くろしお出版
- ・『英語の習得と使用—バイリンガリズムの視点から』(2014) 単著. 溪水社



教授
平山 直樹

私の専門分野は英語学で、15世紀イギリスの名家であるパストン家の人々が書いた日常の手紙や法的文書などの英語を研究しています。書き手が自分の考えを表す時に使うI thinkや、相手にお願いする時に使うI pray youが、文の最初、内部、文末で使われる場合に、それぞれどのような意味を持っているかを明らかにするために、手紙の送り手と受け手の社会的な関係や、日常の手紙なのか契約書なのかという文書の形式の違いなどに着目して調べてきました。

授業は教養教育科目の英語を担当しています。TOEIC対策の授業ではテスト対策をするだけでなく、ビジネスや日常の場面で使う英語の基礎力を身につけることを目指します。また、読解演習を中心とした授業では、文構造や談話構造、更には英語と日本語の事態に対する認知方法の違いにも留意して解釈をする練習を繰り返します。これにより、辞書と読解方略を組み合わせる英文を正しく読み、授業後も自己学習を進められる力を身につけることを目指します。



14-15世紀にパストン家所有の家があったと言われている、英国ノリッジのエilmヒル

おのみち文化スタディ



おのみち文化スタディは、新入生と上級生・教員が一緒に街歩きをして、尾道の歴史と文化を学ぶ教育プログラムです。2024年度は5月11日(土)に尾道散策、6月14日(金)に報告会を実施しました。尾道散策の日は晴天にも恵まれ、6つのグループそれぞれが、海の幸やスイーツを堪能したり、ワイヤーアートや活版印刷を体験するなど、楽しみながら尾道の魅力を学びました。また報告会の日は、グループごとにスライド資料を使いながら10分程度の発表を行い、尾道についての学びを深めました。

*スライドは報告会で使用されたものを転載しました。



松江城



出雲大社



出雲大社「神在祭」
かみありさい

日本文学科専門教育科目の一つで、3年次以降に履修する科目です。授業の目的は、日本文学研究と文芸創作に結びつく実地踏査をおこない、机上の学習では得られない資料収集や調査研究能力を養うことです。また、事前学修と事後学修をととして、企画立案能力と報告能力を身につけながら、歴史学・民俗学・日本語学および日本文学等の点からも広く日本文化について学ぶこともねらいとしています。

授業では例年、2泊3日で教員引率型の実地踏査をおこなっていましたが、新型コロナウイルス感染防止期間中は集団での実習は中止となっていました。しかし、コロナ5類移行という時期を迎えたことから、2023年度から日帰りの集団踏査を再開し、2024年度は感染症対策に配慮しつつ、宿泊を伴う実地踏査の再開として、1泊2日の調査を行いました。踏査地を島根県松江・出雲地区に設定し、出雲神話の舞台となった史跡や松江城、小泉八雲ゆかりの地など、山陰地方の豊かな歴史・文学遺産を巡る学修プログラムを展開しました。履修者は事前学修を踏まえ、集団での実地踏査に加え、個人でのフィールドワークも実施し、その成果発表と報告書作成をおこない、報告書を『尾道文学談話会会報』第15号にまとめました。

尾道文学談話会



尾道文学 談話会会報

第
15
号



尾道市立大学 芸術文化学部 日本文学科

尾道文学談話会会報 第15号表紙デザイン
美術学科2024年度卒業生 黒山穂乃香さん

日本文学科を中心とする本学の教員が文学や言葉にかかわるさまざまな話題を提供し、地域の方々と大学の外で語り合う形式の公開講座です。ここでの成果は毎年『尾道文学談話会会報』にまとめられており、会誌の内容はインターネットでもご覧いただけます。



会報第15号はこちら

2025年度・尾道文学談話会 (全6回)

- 第1回 「妖怪カルタの遊びと学び―村上海賊ミュージアム資料より―」
藤井 佐美 (日本文学科教授)
- 第2回 「備後方言のこれまでとこれから」
灰谷 謙二 (日本文学科教授)
- 第3回 「白玉か何ぞー『伊勢物語』の歌☆物語ー」
宮谷 聡美 (日本文学科教授)
- 第4回 「江戸時代のカッパ(河童)たち」
吉田 幸 (日本文学科准教授)
- 第5回 「ことばに反映される創造力―レトリックの思考法―」
高島 彬 (日本文学科講師)
- 第6回 「SFを読むキーワード：エイリアン」
小畑 拓也 (日本文学科教授)

虚構研究会



虚構研究会

虚構研究会は人文学・芸術分野の様々な事象について情報共有・意見交換を行う場です。文字を媒体とした文学ジャンルはもちろん、視覚映像・音声・空間、さらにはそれらが複合するものも含めたあらゆるメディア上の虚構・物語・表現を、研究・考察の対象にしています。

これまでに、参加者が推薦するマンガや小説を取り上げた読書会、海外アニメや映画を分析的に見るための鑑賞会、特定のビデオゲームについて考察する討論会、好きな楽曲を挙げて音楽的な視野を広げてゆく会、ジャンルを問わず自分自身が影響を受けたものについてゆるゆると語り合う会などを行ってきました。

人間が認識している世界(現実)は、人間が五感を通して得た情報をすべて人間に把握可能な形に再構成し、書き直した「虚構」です。私たちを取り巻く「現実」という「虚構」と一緒に読み解いてゆきましょう。(小畑 拓也 研究室)

高橋新太郎文庫

近代文学研究者、学習院女子大学元教授・高橋新太郎氏(昭和7～平成15)は、貴重な資料を含む膨大な蔵書を残されました。現在、日本文学科では、資料の整理、資料の展示会開催、データベース化作業に取り組んでいます。

2024年に開催された「オープンキャンパス」での展示



伝承文化研究会



大学周辺のお祭り



村上海賊ミュージアム
特別展示の様子

日本の様々な伝承世界について、文献調査やフィールドワークから研究しています。祭を追いかけてたり縁起物を探したり、民話の採訪、古文書の活字化やデータベース化なども進めながら、後世に伝える方法を模索中です。くずし字から読み解いた『ばけ物三十六歌仙』の研究成果は『尾道文学談話会会報』第12号に掲載し、所蔵される村上海賊ミュージアムの特別展示や本学でもパネル展示をおこないました。これからも日本の多様な文化を楽しみながら伝えていきます。(藤井佐美研究室)

おのみち文学三昧

尾道市立大学日本文学科

尾道市立大学日本文学会

おのみち文学三昧は、尾道市立大学日本文学科・尾道市立大学日本文学会共催の文学イベントで、毎年12月に尾道駅前のしまなみ交流館で開催しています。



第二部では、広島県出身の芥川賞作家小山田浩子さんと学生有志による公開トークイベントを企画し、日本文学科の特色の一つでもある〈創作〉の魅力を会場全体で共有しました。



昨年度は、第一部の学会大会で、三年生研究発表会発表者の中から選抜された四名に、日本文学科の新任教員一名を加えた五名が、文学とその周辺領域に関する最新の研究成果を発表し、活発な議論が交わされました。

4年生
森 俊介



時は承久の乱後、鎌倉中期。一条実経は左大臣、関白、摂政に昇り詰めるも失脚して十数年後にまた政界復帰、と激動の人生を送りました。そんな老齢の政治家が死ぬ前に、今まで詠んだ和歌を選び、並べ、出来たのが、私家集『円明寺関白集』です。彼はなぜ家集を作ったのでしょうか？ 謎に迫るべく研究発表に取り組みました。

4年生
金藤 花林



志賀直哉『クローディアスの日記』において、典拠である「ハムレット」と作品内の呼称に注目し、そこから見出される《主人公の心の性質》に後の志賀作品生成への道筋があることについて発表しました。発表を通して自身の研究を振り返ることができ、様々なご意見を頂けたことで新しい視点を持つきっかけにもなりました。

4年生
大本 日菜子



尾道市浦崎神楽と松永湾周辺の地域の神楽の起源と継承について、フィールドワークを中心に郷土資料も確認しながら研究発表を行いました。発表を通して、貴重なご指摘、ご意見をいただき大変勉強になりました。地域の神楽の魅力を広めることができる良い機会をいただけて嬉しかったです。

卒業論文の階梯（2024年度卒業生 延永千佳さんの場合）

タイトル：『『とりかへばや物語』の宰相中将の人物像について―色好みの貴公子の面から―』

1. 卒業論文の内容 ― 平安時代末期の物語『とりかへばや物語』の宰相中将を、色好きな貴公子としての面から考察しました。物語本文の表現に注目する他、他作品の色好みの貴公子とされる人物（光源氏や匂宮など）の描写との比較をしています。また、宰相中将と、『とりかへばや物語』の他の王朝文学作品に對するパロディ的な読みとの関係にも触れています。

2. 完成までの学修の履歴

1 年生

必修授業である基礎演習の授業等を通して、研究の方法や論文執筆の土台を学びました。また、興味のある授業は積極的に履修し、知識を広げました。

2 年生

3年次のゼミ選択を見据え、中古文学の専門演習を履修しました。専門演習では、自身の調査研究や考察の発表や、他の受講生との質疑応答を通し、考察をより深めたり、多角的な視点を学んだりしました。

3 年生

卒業論文で取り上げる題材を決め、週1回開催されるゼミで、他のゼミ生と意見交換しながら、研究を進めました。特に、11月にある中間発表を目標に、研究の方向性や論点を定めていきました。

4 年生

10月の中間発表までに、卒業論文の大まかな目次や中身を詰めるため、4年生前半では調査・考察を中心に研究しました。その後は卒業論文を執筆しながら、足りないところの研究も引き続き進めました。ゼミでは、書いたところまでをゼミ生同士で目を通し、ブラッシュアップしました。

3. 日本文学を学ぶ意義 ― この4年間、日本文学を学び、文学作品やその研究を通して、様々な作品世界や観点に触れてきました。その中で、作品世界に留まらず、自分の周りの他者、更には自分自身を理解し表現する、様々な指標・視点を学びました。その多様なものの見方を養うことが日本文学を学ぶ意義ではないでしょうか。



卒業論文

2024年度卒業論文・卒業制作・修士論文

●文芸創作領域	●幸せの引き算 ●清水にすむ ●未完 Sandbox・サンの深夜の寸劇人生相談 ●さゆりにあらず ●葦の髄から天井をのぞく ●刻刺す時は ●九夏の桜 ●予めご了承ください ●忘失の夏 ●夏虫水を疑わず
●日本語学領域	●七月隆文『100万回生きたきみ』における恋愛要素に関わる表現の研究 ●広島方言話者における関係性と文脈からみた方言の調整行動についての研究 ●大阪府方言における否定形式「ヤン」についての研究 ●岡山県岡山市方言の若年層におけるガ系文末詞「ガン」に関する研究 ●時代浄瑠璃の文体の研究 ―『国姓爺合戦』における下二段活用動詞の形態を中心に―
●日本古典文学領域	●和泉式部歌の独自性について ―自己表現の方法に注目して― ●中古和歌文学作品における「紅」について ●『源氏物語』帯木巻「雨夜の品定め」―四人の女性と物語のはじまり― ●『落窪物語』におけるあこきの人物像について ●『とりかへばや物語』宰相中将の人物像について ―色好みの貴公子の面から― ●登場人物の死からみた『大和物語』の独自性 ●後醍醐天皇の政治と文学 ―正中二年七夕御会和歌懐紙を中心に― ●恋川幸町とその周辺 ―『百福物語』と『江戸前噺鯉』を中心に― ●男色の描かれ方 ―容姿・身だしなみ・心持ちを手掛かりに―
●日本近現代文学領域	●作家の宗教観が文学作品にもたらす影響 ―三浦綾子の自伝『道ありき』をもとに― ●野坂昭如の描く戦争とその受容について ―「アメリカひじき」「火垂るの墓」「戦争童話集」を例に― ●木下龍也 短歌の特徴とその変遷 ―個人歌集収録歌の分類から― ●村田沙耶香『コンビニ人間』論 ―特徴的なキャラクターの描かれ方とその背景― ●生成系 AI によるアニメオープニング楽曲の歌詞解析の試行 ―アニメシリーズ『ソードアート・オンライン』を基に― ●袖月裕子『孤狼の血』論 ―暴力団を取り巻く社会背景と暴力団像― ●加藤武雄『君よ知るや南の国』論 ―対立する職業的成功と恋愛― ●(創作)「明暗のサウンドスケープ」 ●谷崎潤一郎『小さな王国』論 ―教育思想と反逆―
●中国文学領域	●荀氏『靈鬼志』研究 ―鬼王について
●伝承文学領域	●静岡県伊豆の民話「仙人みかん」の考察 ―神秘性と果物の由来― ●マヨイガ譚の発生と伝播 ―伝承経緯の考察と文章資料の課題― ●徳島県祖谷溪の平家落人伝説の研究 ―近隣地域との比較を通して― ●蠟燭をめぐる行為の研究 ―息・火との関係に注目して― ●送り狼の考察 ―変遷と受容について― ●継子話「皿々山」の特徴 ―「糠福米福」との比較を中心に― ●『絵本百物語』赤い魚についての考察 ―その由来について― ●岡山県富峠伝説「巡礼狼」の研究 ●『日本霊異記』からの三途の川の変遷 ―冥界説話での道行き― ●愛媛県に伝わる首なし馬伝承の研究 ―信仰における成立背景と役割―
●国語教育学領域	●国語科教育における「物語創作指導」の研究 ●高等学校における通級による指導の充実を目指して ―インタビュー調査から考える今後のインクルーシブ教育システム― ●学校図書館を利用した効果的な国語授業の在り方について ●高等学校国語科における探究的学習課題の研究 ―「古典探究」の場合― ●大学入学試験の国語が問うている学力 ―大学入試センター試験から大学入学共通テストの変遷を踏まえて―
●欧米文学・比較文学領域	●筒井康隆『虚人たち』における語り手についての分析と考察 ―物語の構造と主題をテキストから明かす― ●小説『床下の小人たち』と映画『借りぐらしのアリエッティ』の比較 ―登場人物や小人たちの道具を中心に― ●少女向けアニメーションにおけるジェンダー／セクシュアリティ表象 ―『美少女戦士セーラームーン』と『少女革命ウテナ』の異性装キャラクターを中心に―
●2024年度修士論文	●中学校における「読むこと」と「書くこと」の関連指導